

第7回

～洋書絵本の専門店が贈る～

『のんびり洋書めぐり』



Ehon House

(株)岩崎書店 絵本の家事業部 仕入担当

望月真由



■ えほん50

毎年、「日本絵本賞」を主宰する全国学校図書館協議会（SLA）。日本絵本賞選考の際に作成される推薦図書リスト「えほん50」は、1年間に刊行された新刊絵本からリストアップされ、その顔触れは実に多彩です。和書あり、翻訳絵本あり、選ばれし絵本たちはどれも子どもたちと読んでみたくなるものばかり。洋書を仕入れる業務の日々、どうしても翻訳絵本に目が行きます。この1年は、こんな絵本が日本語になり、紹介されたのだと1冊1冊翻訳絵本を追っていくと、おのずと浮かび上がってくるキーワードがありました。

■ SDGsというキーワード

そのキーワードとは、SDGsです。えほん50に選出された翻訳絵本に、絵本の家×SDGsプロジェクトで取扱い候補となった絵本がたくさん入っていたのです。絵本の家×SDGsプロジェクトとは、子どもたちとSDGsを考えるうえで、ヒントがたくさん詰

まった絵本を世界各地の出版社から集め、SDGs活動とともに洋書絵本の魅力をどんどん伝えていきたい!というコンセプトのもと、始動したばかりのプロジェクトです。



※国連にプロジェクトの趣旨を説明し、協賛ロゴ使用が許可されました。このロゴとともに、SDGs活動と洋書絵本の魅力をより広めていければと思っています。

■ SDGsと国連ブッククラブ

SDGsとはそもそもどういった活動でしょうか？SDGsとは、2015年に国連が提唱した Sustainable (持続可能な)+Development (未来のための)+Goals (ゴール)。国連の17のアイコンとともに年々広がりを見せている、国際的な問題解決のアクション



写真①:2021年直営店で開催したSDGsフェアの様子



写真②:絵本にはSDGsのゴールに対応するステッカーを貼付

です。緊迫する問題を解決するために、賛同する人々が増え続け、今、地球規模で大きなムーブメントになっています。具体的な17のゴールは、カラフルなアイコンで表され、複雑に絡み合う地球規模の問題を、世界中の人々が「自分のこと」として考えるヒントを示してくれます。

さらに国連は、UNブッククラブというサイトを始め、SDGs17のアクションそれぞれにふさわしい、おすすめの子供書を紹介しています。これは、SDGsが大人だけの議論に留まることなく、未来を担う子どもたちにも積極的に取り組んでほしい活動であるということを示しています。

■ 洋書絵本にみるSDGs

そもそも欧米絵本業界では、環境や人権など、SDGsを子どもたちに伝えるのに最適なテーマの絵本が実に豊富です。環境問題や人種差別などといったテーマは、もはや目新しいものではなく、数年前から積極的に採用され、近年では確立されたテーマとなっています。

しかしこうした絵本は、日本に紹介するには工夫が必要でした。「テーマが少し難しい」「英語だとさらにとっつきにくい」といった反応も多く、いい絵本でも需要は伸び悩んでいました。翻訳絵本であるためタイムラグはありますが、こうした絵本が「えほん50」に多く掲載されています。絵本を通して、日本の子どもたちにも知ってもらいたいテーマのひとつになったことの表れだと言えるでしょう。最新洋書絵本マーケットは、国際情勢や国際問題に実に機敏です。例えばエゴに関して教える絵本などは、赤ちゃん絵本のジャンルにまで浸透しています。サイエンスについて教える絵本も、

近年はボードブックのような子どもたちも読みやすい絵本が急増しています。こうした子どもたちに未来を見据えた問題を語り掛けるテーマの絵本は、とても価値あるものだと思います。理想を言えば、洋書絵本のままご紹介できれば、より世界の流れをタイムラグなしに子どもたちに知ってもらえる。世界の子どもたちが身近に考えている地球規模のテーマを、日本に住む子どもたちにもできるだけ早く届けたい。日々世界中の最新絵本をチェックしながら、心の中で膨らむ願いです。

■ えほん50にみるSDGs

しかしながら、近年の日本でのSDGsの広がりを目を見張るものがあります。日本の書店児童書売り場にもSDGsの文字が並び、学校現場でも学習テーマとして頻繁に取り上げられるようになりました。先述したように、こうした需要と、先に述べた海外絵本の充実したテーマが合致し、えほん50翻訳絵本ラインナップにSDGsをキーワードとした絵本が多くみられるようになったのではないかと考えます。特にお勧めの数冊を、以下にご紹介したいと思います。

SDGsおススメ絵本のご紹介

The Day War Came (邦題:せんそうがやってきた日)

こちらは私も大好きな絵本作家レベッカ・コブによる絵本。イギリス出身の彼女の絵本は、「グラッファロ」で有名なジュリア・ドナルドソンと共作「ペーパー

ドール」や「ランチタイム」など、現地絵本売り場には全ラインナップが必ず揃うほどの人気です。そんな親しみのあるイラストで描かれた『せんそうがやってきた日』は、移民や戦争という問題が、遠く離れた国で起こることという概念を打ち砕きます。日常を突然、奪う悲劇。家族や友人を引き裂く、圧倒的な力。オンラインでいくらでもリアルタイムの映像を見ることができ、今だからこそ、「子どもたちにどう伝えたら良いだろう」と大人が頭を抱え、苦悩し、生み出した戦争の悲劇を伝える絵本は、貴重で子どもたちに安心して見せることのできるメッセージです。

The Water Princess (邦題:みずをくむプリンセス)

こちらはアフリカ・ブルキナファソ出身のスーパーモデル、ジョージ・バディエルの幼い頃の体験談をもとに誕生した絵本。アフリカのとある王国のプリンセス、ジージーは毎日水を汲みにいかなければなりません。ティアラの代わりに水汲みの瓶を頭に載せ、来る日も来る日も水汲みに歩く日々。いつの日か、王国で冷たいお水がいつでも飲める日がやってきますように。現在もアフリカの村々に存在するこうした問題に世界の目を向けてほしい、世界的モデルと活躍するジョージが絵本に託した、子どもたちへの強いメッセージが伝わってきます。

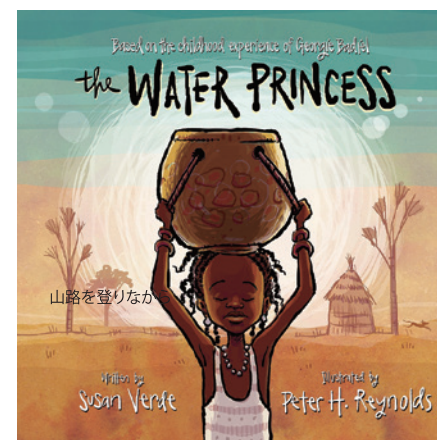
ブルキナファソという国をご存じでしょうか？私にとっては、とても馴染み深い国です。長女は小学二年生のころ、毎日ブルキナファソの国旗を描いていました。赤と緑のクレヨンはずり減り、部屋はブルキナファソの国旗だらけ。実は父親が仕事でブルキナ

ファソへ数週間出張し、国旗を描き続け、その帰りを待っていたのです。

ジョージが絵本で語ったように、ブルキナファソでは現在も教育施設の整備など、子どもたちをめぐる諸問題を解決するために、国際的な支援を受けている国のひとつです。しかしこの絵本が伝えることは、問題提起ではありません。長女は無事帰国した父親から、ブルキナファソの特産物である、カラフルな手編みのかごをお土産にもらっていました。東京のおしゃれな雑貨屋で目にする手編みのかご、その多くはブルキナファソが原産です。*The Water Princess* から溢れ出るアフリカ特有の文化や風景、現地に脈打つ伝統民芸は、遠く離れた日本にいらからこそ、その美しさに感嘆し、異文化への興味が湧きあがります。



ブルキナファソの伝統的な籠（写真上）
父の帰りを待って、長女が何枚も書いた
ブルキナファソの国旗（写真下）



The Water Princess

by Susan Verde, Georgie Badiel, Peter H. Reynolds (PRH 2016) (『みずをくむプリンセス』さ・え・ら書房、2020年、さくまゆみこ訳)



Text copyright © 2016 by Susan Verde / Illustrations copyright © 2016 by Peter H. Reynolds
アフリカに家族で4年ほど生活しました。アフリカの大地はこの絵のように、ただただ広大で、自然の圧倒的な大きさに多くを学びました。



The Day War Came

by Nicola Davies / Rebecca Cobb (Candlewick 2018)
 (『せんそうがやってきた日』鈴木出版、2020年、長友恵子訳)

